

「スリランカは大丈夫？」と最近よく聞かれる。

日本では知名度が低いスリランカ支援に関わっていると、最初に言われるのが「どこにあるの？」。

そんなスリランカが経済危機の混乱が拡大していることから最近メディアで騒がれている。ネガティブな情報ではあるが、正直、日本人の中でも少しは関心が高まっていると思っ

る。私たち日本スリランカ次世代育成サポートは、多文化共生による平和な社会を目指すことを目的に沖縄スリランカ友好協会の任意団体から2020年にNPOとして法人化した。その後、日本の大学教授で教育者の理事長が、日本



真貴子 機関

論壇

の教育要素を取り入れた学校を母国につくりたいと「きぼう学校」を2021年に開校した。コロナ禍の中、40人の園児と小学生が入学し、今年1月には開校1周年記念として、絵画コンクールを開催した。

この開催を「きぼう学校」の生徒に伝え、子どもたちに自信を持たせ、自己肯定感を高めた」と理事長は考えている。国を思い10年、20年後のスリランカの担い手になる人財を育てるために奮闘している。

多文化共生とは何か、私たちができることは何か。私たちが認識することは大事ではないかと思う。

スリランカとの草の根交流

多文化共生へ違い認識を

展」を沖縄県立図書館3階で8月8日まで開催している。

総務省によると「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義されている。

スリランカの置かれている現状は厳しいが、未来に向けて草の根的な交流を行うことは、私たちができることの一步だと考えている。

小スペースの一角に、画用紙いっぱい色彩豊かで、ユニークな生活の一部や風景が描かれ、素直に表現された作品を見ると国の情勢が不安定な中、子どもたちはすくすくと育っていると安堵した。

（那覇市、NPO法人日本スリランカ次世代育成サポート事務局長、50歳）

だ。違いは当然だと認識するだけで、新しい発見があり、喜びにもつながり、多面的視点を養うことができる。コロナ禍を体験した私たちは、これまでになく違いの価値観があることを認識することは大事ではないかと思う。